

## 大人同士の関係性を作る

～認知症の人に、嘘をつてもいいのでしょうか？～

滋賀県草津市の小規模多機能ホームあん矢倉に介護職員として勤務しております、上山晶子です。私が勤務する「小規模多機能ホームあん」は、通い・訪問・泊まりのサービスを一体的に提供する、地域密着型の小規模多機能型居宅介護事業所であるため、すべてのサービスに一事業所のスタッフが対応でき、環境の変化を最小限にすることができるサービスです。

誰もが人生において最後まで主人公である。

自分らしい暮らしを継続でき、安心して高齢期を迎えられる理想の地域社会を実現する。

私たちの事業所では、このような理念を掲げています。

この理念を実践するために、100以上の短文で具体的に表現した『理念に基づくキーワード』を自分達の中に落とし込み、実行することによって、理念を顕在化する努力をしています。今回は、その中でも「認知症になったとしても大人同士の関係を構築していく」ための、いくつかのキーワードをご紹介します。

\*

まず、『嘘をつかない。テクニックとしての嘘も含む』というキーワードから紹介したいと思います。

皆さんはご利用の方が「家に帰りたい」とおっしゃって、内心困ってしまうことはありませんか？

そんな時、私たちは帰る時間や、誰が自宅まで送るのかを伝えたり、または泊まる予定の日には今日は帰れないけど明日送りますと誠実に説明をすることで、折り合いがつく場合があります。

説明をしても折り合いがつかない時は、ご利用の方の「帰りたい」という想いに、とことん付き合います。

ご利用の方の話を聞き、時に外へ出たり、ドライブに行くこともありますし、一緒に自宅まで歩いたこともあります。

そうするうちに、職員との会話を楽しみ、ここに居てもいいかな、というような気持ちになる時もあります。

一方で、「そんなことない！」「今から帰る」と怒る方もいらっしゃいます。

帰りたい気持ちが強い時は、自宅に送ることもありますが、ご家族が不在で、自宅に送れないときもあります。

こんな時、嘘をついてはいけないからといって、やみくもに本当のことを言い続けたり、真実を言い含めたりすれば良いのでしょうか？

そこで、次のキーワード「議論に勝つ必要はない」をご紹介します。

嘘もつかず、議論にも勝たず。では、どうするのか。

その方の思う真実と、現実には相違がある時は、肯定も否定もせず、「そうですね。そう思っているのですね」と、その方の気持ちを受け止めます。

例えば「帰りたい」というご利用の方には、帰りたい理由を聞いたり、ご家族が待っているという方には、関係性やどんな方なのか、などのお話を伺ったりします。

なぜそう思うのか、ご利用の方の立場になって話を聞きます。私達の接し方によっては、ご利用の方の気持ちが変わることもあります。

嘘をついた方が楽だと感じることもあります。しかし、例え記憶を失われたとしても、感情は失われないと言います。嘘をつくことによって、信用を失えば良好な関係を築くことはできません。

\*

次に『関わりを持つ相手は、“利用者”ではなく、年齢を重ねた“人”である』というキーワードを紹介したいと思います。

これは知り合いから聞いた話です。ある施設で働いていた年配の男性Aさんが、ある日を境に、仕事場に来なくなりました。その後Aさんは、施設に利用者として来ました。同僚として働いていた時は、「おはようございます」と敬意ある態度を取っていた周囲の職員が、利用者として来たAさんに「おはよう、Aさん」と今までと全く異なった対応をしていました。それを見た知り合いは非常にショックを受けたそうです。

同じ人なのに、立場が変わったからといって、接し方まで変わってしまうのでしょうか。

どのような疾患があろうと、私たちが関わりをもつ相手は“利用者”ではなく、年齢を重ねた“人”なのです。

では最後のキーワード『する側、される側ではなく、大人同士の関係性を構築する』を紹介したいと思います。

自分たちの祖父母も、ご近所の高齢者も、事業所を利用する高齢者も、年齢を重ねた人であることに変わりはありません。人生の先輩に対して礼節をわきまえた付き合いをするのは当然のことであると考えます。

ところが、世話をする側、される側と認識してしまうと、間違った力関係が、生まれる危険性があります。

あくまでも大人同士の関係性を構築し、お互いが助け合う地域の一員となることで理想の地域社会を築くことができると信じています。

ご清聴ありがとうございました。